<table>
<thead>
<tr>
<th><strong>Title</strong></th>
<th>北村季吟『古今拾穂抄』について：教端抄の成立</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>Sub Title</strong></td>
<td>Study of Kitamura Kigin's Kokin-shusuisho</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Author</strong></td>
<td>川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Publisher</strong></td>
<td>慶應義塾大学附属研究所斯道文庫</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Publication year</strong></td>
<td>2006</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Abstract</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Notes</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Genre</strong></td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
</tbody>
</table>
北村季吟『古今拾穗抄』について

教端抄の成立

はじめに

平成十七年の東京古典会古典籍展覧会に『古今拾穗抄』と題する写本が出場された（目録223番。一覧したところ北村季吟の『古今集教端抄』の一伝本であることがわかった。奥書に元禄十三年の年記があることから、既に影印本が出ている国文学研究資料館初版文庫本と同一系統本かと思えたが、従来未知の奥書もあり、写本も完好しく感じられたので入札したところ幸いにも家蔵するを得た。そこで本稿において家蔵本の紹介を試みることとした。

川上新一郎
冊より順に、九丁、八三丁、一〇〇丁、九四丁、一二三丁、
五二丁、七六丁、八八丁、遊紙、第一冊、前一丁、後二丁、仮
名序注の次二丁、他冊、前後各二丁。字面高さ、約三一、五様、
注約二下目、時に更に一字下げする。まま重仮あり。每半葉
十二行書、内題なし。朱声点を付す。また、第四冊の仲庵年譜
の界線を朱で引く。奥書は複雑であるので、後述する。印記な
し。

本書は全卷一筆で、一見季呂の筆跡に類似しているが、自筆
ではない。しかし、丁寧な書写態度で装丁も立派なことから、
単なる転写本というより、季呂自筆本によってした基本的な写本か
と思われる。

分冊は以下の通りである。
第一冊、仮名序末
第二冊、真名序末
第一冊卷一、二
第二冊卷一、二
第三冊、卷三、五
第四冊、卷三、五
第六冊、卷十五、十六
第七冊～十八

元禄十四年、巳年七月二十一日秋雨桐葉落時握筆於再昌院

元禄十四年、巳年七月二十一日秋雨桐葉落時握筆於再昌院

元禄十一年、丙年九月五日重譯。筆月十五日終此卷

季呂

従卯月八日至十八日。清書之

季呂

湖春

元禄十一年、丙年九月五日重譯。筆月十五日終此卷

元禄十一年、丙年九月五日重譯。筆月十五日終此卷

元禄十一年、丙年九月五日重譯。筆月十五日終此卷

此一卷元禄十一年六之四清書之
この事に関して、本書には講談の第何日目及びその日の訳解歌数が記されており、それによって季呂の講談の証と見られるかごくであるが、それは正しくない。例えば、巻一、50『山た

かみ人もすきぬさくならばいたくなわびせみはやさん』の注の終りに、「右第二日講談三十首」とあるのは、「一見季呂の

講談日付のようであるが、その前の20『あげさるをしてはるさ

めふふりぬあすへふらば若葉つみてん』の注の後に「以上

日付は季呂のものではなく、季呂が参考にした一華堂切臨の

二華抄の講談日付の引用であることは明らかである。

湖春の註解の進行状況であるが、本書では巻二末の奥書によ

るで、巻二が元禄六年四月二日に終了したとしか知らないが、日大

本には、巻一末に「元禄六年正月廿日始述作、三月廿日書

早、湖春」とあり、さらに巻三末に本書と同じ湖春の奥書があ

るために、元禄十年正月湖春の完成することを求める、

となく、元禄十年正月に湖春が完成することを求める、

季呂はすぐさま関二月十五日から稿を書きついで、七月廿日に

早くも完成されている。湖春に先立たれた季呂にとって、孫湖

元がまだ若年であるので、何としても自らが生きている内に完

成させなければならなかったのである。

－88－
江戸城五の丸に住む女性を意味する。「五丸様」は『の五の丸様』

結論から言えば、「五丸様」は、小谷氏出身でお伝の方とし
て呼ばれる織吉の愛妾で、織吉の子徳松君、鶴姫を産んだ後の
瑞春院（「五十八・七三八」）のことである。お伝の方は三の
丸様と呼ばれる桂昌院後（正確には織吉後）、三代に移っ
たため、後代「三の丸様」とも呼ばれていまきらわしい。元
禄十一年の時点で「五丸様」がお伝の方であるとし、

徳川実紀『常態院殿御実紀巻』四、元禄八年八月十日条に
この日より前後、桂昌院殿を三丸殿と称すべき旨頒出される

小谷のの、いまでは御袋の方と称すことへも。今よりのち

の丸の方と称すべきとなり、つるののことをは良かろう

巻二十末に書くはさらに五丸様に献上の木の体裁が記され

の、『本』以下である。実はよくわからないところがあ

の、『子』の四半の、であるが、『ふぢ』とは『蠟

がんで、『布』や紙などの薄く、のいた地質。また、のい

の丸のの、に光沢のある地質。（日本国語大辞典）のことである

に「日本国語大辞典」とある。』走出絵に泥絵のなること

どあり、『金人』は『日本国語大辞典』に『蠟物で、模様な

と金系を用いること』とする。】重複が生じるようである。

言葉、』なお、『蠟絵に泥絵を描いたものであるというの

あり、』見返しの説明であるよう。

そしてその本を但馬桐の箱に収め、銅のehenに難を

留め、それで結んだというのである。」と『織』『織』は

が四半だということである。これが料紙を言っているのか、

に与る、『筆の海』の歌を賜った。そこで季吟は『水ぐるの』

こうして『散歩抄』一部をお伝の方に献上したところ、御感

か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

の蠟の金人』をそれとして、以下のようになる表紙であるから、

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地

下の表紙の説明か問題である。しかし、表紙の説明は『蠟地
年いづれとかいはんだと、此歌としの字四あり、今はか

くはあるまじさ也

宗祇又、古今の両字此首にあり

也

泰昭水正記も師説におなじ、此哥義なき所を以

頭にいれ絵ふと也、年内の立春をさしきて説り、此其

義なくむきたる所、此集の本誌に正記

日大本は本書ときめて近いので、改めて引用しないが、

「師説、去来とあればんの字」とし、也といはんの字

 BXも欠くのみで、順序を含めて他はほとんど同じである。「十一

口抄」が「宗祇云」となっている点である。この点は、日大

文庫本では「宗祇云」となっている点である。この点は、日大

本でも「宗祇云」となっている。後述するが、「十一口抄」の

記述の順序にも相違があるが、内容の増減については、「本書の

方が古い形で、後に「宗祇云」と改められたと思われる。また、

の後半と「永正又」引用する所と、「泰昭水正記云」

の関係。「雲々」と「近代秀歌」引用する所は、初雛文庫

あり、定家卿たてたるやを用ひ絵ふ、奥書に且師説加

了雲々、此心也

三吉野、よしの、山、延五記文、三吉野、郡の内の吉野

山なり、師説、三吉野は上の吉野、中の吉野、下の吉野

である、也、又、むかし天武帝の皇居なる故にたつと

て御吉野と云、難波の御津のことし、十一口云、哥の心

は、春の気色をも先主吉野の山にそぞるべけどと詠る

に、雪のみうち散つ、春のけしきもなければ、春がすみ

に、日大本であるが、片桐氏の引用と比較すると次のように

なる。
たてるや、いづこと云、あはれ霞もたてがしと思ふ心あり、
飛鳥井家説、霞の立たるはいづくぞ、吉野山には
雪のふるを、春のつとといふところしからずとが
めてより、十口云、是造化の力の根のさも、理をさ
しをきてうら呟じてるべし、雪はふるつ、といふふる
いへり、此成にか、はららずしてさるくと誂呟の所
のみ、定家卿はたてるやを用給ふ、奥書に且師説加之
有、有造化の力の根のさも、理をさしをきてう
雪はふるつ、といふふるに心得べし

宗祇、成卿は、るや、いづこ面面白きし故来風体に
思ふ心有、遠白き体の村のさも、理をさしをきてう
ち呟じてるべし、雪はふるつ、といふふるに心
得べし

永正、深雪のふる所なければかくやへり、此成にか、
はららずしてさるくと誂呟の所風情に付て呟呟すべき
と被仰也、みよしの、よしのはいかくと問申候るにか
さね詞のやうに心得べ、

師説云、此重詞といふ語、尤可吟観、

例によって、本書の「十口」が大本では「宗祇」、

「飛鳥井抄」も大本では「宗祇」と

頭注、飛鳥井抄、たてるや、いづくぞ

師説云、此重詞といふ語、尤可吟観、

行「師説云」が本書にはない。
前者について見ると、本書では飛鳥井家説が本行のため、
日本では「宗祇抄」が一箇所に集っている。但し、大本は文章の流れが自然のように思われるが、出典の「十口抄」
と比較するところとも言えない。

「十口抄」には次のようにある。　

（前略）

この心は、春の気色を先にし、山にこそ見待らめ
と為もなるに、雪ちぢり、雪の気色もおぼつかな
であれば春の冬のやづこと云え。これを又すにいかく
をねがは花を思ふ心も他の、雪はとれ野山高き
所ならば、やみならばこれ役る、又の説、ことなりてを
かくいは初心の人もため、ひきつつれて云哥也。

最初の「十口抄」は「十口抄」の末尾部分であり、これは「古
開」よりの書人である。　

次の一箇所の「十口抄」が大本では一続きになっている。
しかし、「十口抄」で見ると、一続きの説ではなく、大本
の記述は不自然である。

いずれにせよ、この部分、「十口抄」を一続きとする日大本
の方が正しいとは必ずしも言えない。また、頭注にするしない
はそれぞれいずれも可能と考えられる。

但し、本書では「十口抄」は小字部分を区別する場合もある。そ
もそも「十口抄」は何人かが「両度開書」を本行に書き、さら
に「古開」と「宗祇開書」を参照し、「両度開書」見えな
い説を選んで、小字傍書で書入れ、「古開」は黄色、「宗祇開書」
は朱色の合点を付して区別したものである。

さて、本書では「十口抄」とする部分が三つに分かれている。
これも「両度開書」が二人かが「両度開書」を本行に書き、さら
に「古開」と「宗祇開書」を参照し、「両度開書」見えな
い説を選んで、小字傍書で書入れ、「古開」は黄色、「宗祇開書」
は朱色の合点を付して区別したものである。

豊成はたるるや二つ面白よし古来風説あり、定家は
たれる用絵、奥書自任師説又加へ、此心也。
頭歌においては、本書の記述が初雛文庫本、日大本両本の記述を兼ねていていたが、ここでは日大本の方が、いささかであるが、記事が豊富である。

次に、初雛文庫本のこの箇所を示してみる。

『頭注』 古来風駕とは俊成卿の作り給へる抄物也、何故の

また、筆者卿は、本書や日大本とは距離があること

明らかに、初雛文庫本は、本書や日大本とは距離があること

がわかる。叙述順序の異同が著しい。しかし、この箇所では、

記事の増減は意外に少ない。初雛文庫本は、『延五記雲』を欠

くほか、『永正雲』の内、此箇記理にか、はらずしてさるくと

詠吟の所々の風情につきて吟味すべきと被仰し也の部分

引用がない。但し、よく見ると、この部分は『十口雲』の部分

もあれば、『永正雲』の内、此箇記理に、はらずしてさるくと

引用がなさる。筆者卿は、本書や日大本とは距離があること

がわかる。叙述順序の異同が著しい。しかし、この箇所では、

記事の増減は意外に少ない。初雛文庫本は、『延五記雲』を欠

くほか、『永正雲』の内、此箇記理にか、はらずしてさるくと

詠吟の所々の風情につきて吟味すべきと被仰し也の部分

引用がない。但し、よく見ると、この部分は『十口雲』の部分

もあれば、『永正雲』の内、此箇記理に、はらずしてさるくと

引用がなさる。
本書にはこうある。巻

cけにしべきにあり、宗祇云、なかぬ心も、題訳云、烏

のないに涙つべきにあらねども鳴といふにてよめ

る也、屬の泪ともよめり、涙有とも氷らん事如何とおば

れど、冬もは春も雪ふりさゆるには氷の氷る時ひに

音をひらくも涙の水とくると云也、延五記云、春来てはやがて

とてつあるさながら春をしるらんといへるも、此哥を

とれり、密勘云、畜年の雪はいまだ消ぬに日数は春に

成れば、氷の氷雪にとざられて過る鶴の今はさのが

時待而出花木伝ふ心もつひぬらんとのよしと開侍

云、十口云、此哥愁を散ずる心なり、哥はたあは

かなる事をもと、して人之進退を安ずらは

師説、十口抄に処に哥の下心を教訓の説を述ら

がぞれも其意を推して人の為の教訓の助とする所

も侍り、是彼聖賢の断章取義の類也、学者心をつく

 скаなる事をもと、して人之進退を安ずる

師説、十口抄に処に哥の下心を教訓の説を述ら

がぞれも其意を推して人の為の教訓の助とする所

も侍り、是彼聖賢の断章取義の類也、学者心をつく

これも大本ではこうなっている。巻

宗祇云、雪の中を年の内之心と申人あり、不用之題訳同義

こはるなみだとはなかぬ心也是差訳

延五記云、春来てはやがて音をひらくも涙の水とくると

題注云、鳥のなくに涙つべきにあらねども、なくと

いふにてよめてもる也、屬のなみだともよめり、涙有

とも氷らんこといかことおばゆえど、冬若春も雪ふり

さるには、氷の氷る時ひにてよめ、鶴の泪をこら

せたり、密勘云、畜年の雪はいまださきぬに、日数は春に成

けば、氷の氷雪にとざられて過る鶴の今はそのが

時待而出花木伝ふ心もつひぬらんとのよしと開侍

略

巻

宗祇又云、此哥愁を散ずる心なり、哥はたあはかな

巻

宗祇又云、此哥愁を散ずる心なり、哥はたあはかな

巻

宗祇又云、此哥愁を散ずる心なり、哥はたあはかな

巻

宗祇又云、此哥愁を散ずる心なり、哥はたあはかな
内容的には同一であるが、『題註』と『延五記』の順に
逆になっている。
一方、初雁文庫本にはこうある。

これは、本書や日大本と比較すると、
大分簡略である。また、
先の箇所と同じく、独自の顕注は初学のためのものである。

これまでは顕注について述べてきたが、顕注はどうで
きるのか世は、なかなか身名心を続け、
延五記の春に雪にとられて遮る篋は、先が時を流して、花
に木づくふ心をもつきぬらんとのよしを聞きし、宗祗
にこぼるなみだとは、なかなか身名心を続け、
延五記の春に雪にとられて遮る篋は、先が時を流して、花

おおに、仮名序注においては、『教端抄』よりかかなり以前、貞享三
年に（一六八）に成立した香川県歴史博物館藏『古今集抄』
が存在するので、これも比較の対象とする。

この点は、既に片桐氏の比較があるので、同一箇所を取り扱

三
ただ、河上の神、とよみて雨ふりし事あり、新撰撰集に歌唱。喜三年伊勢の勅使にて当日まで雨降りしに本宮に詣で、上部兼直、天津風あめのやへへ雲吹さらしに本宮に詣でて、上部兼直

『神耶集』の心を上げ注解。下図

『神耶集』の心を上げ注解。下図

宗祇云、此段は哥の徳を広げて合いれども、天地をうごかうと云。事理の二つあり、事にうごかすとは、能因が苗代水の類也。理の義は、天地の徳は地道にあらはれ、地の徳は地道にあらはれ、天地を聞き私は天地を開く物なり。しかれば、心さしをべ心に感する所あるちに天地を動すより三四四月雨ふらで苗代えうぎりしに、能因法師、天地を開き我は天地を開く物なり。しかれば、心さしをべて之を検査せんが少もあまんならす神ならば神、

千早照待りけるに雨ごひの和歌もべき宣旨ありて、千早の事、去る神さまばたちはさぎるまでかうとい心せ

詳しく河上の神、とよみて雨ふりし事あり、新撰撰集に歌唱。喜三年伊勢の勅使にて当日まで雨降りしに本宮に詣でて、上部兼直、天津風あめのやへへ雲吹さらしに本宮に詣でて、上部兼直
異国にこななる事のよしなべし

師説、中庸註程子曰、鬼神天地之功用、而造化之跡也、

張子曰、鬼神之氣良能也、愚謂、三氣言則鬼、

者陰之靈也、神者陽之霊也、以一氣言則至而

伸者為神、反而為鬼、其実一物にして、

十口小書には、千々が四鬼、草も木もおはきみの

国ならばいづくかをにの住るなり、といふもぎじ

てに去るたることをひかり、太平記十六人に天智天皇の御

字といへり、日本紀にみえず、不足信用事数、或ひに

にや、四鬼をつかひ事の縁るるな出所みえず、可勘之

に板行の古今の抄、宗祇説のやうに書入たり、此四鬼

書黄点之下る事也、正しく宗祇肖柏などの所為なるを、

世に板行の古今の抄、宗祇説のやうに書入たる、此四鬼

の事、童部之用にたるに事なるべし

はいかだ長の末尾を省略したり、これを「古今集抄」、

初雁文庫本に比較する。

一方、初雁文庫本は本行は「宗祇云」、書人は「祇記小書云」、

または「小書云」としている。但し、一部「古今抄」は「十口抄」、

外の項目を見ても、基本的には本行は「宗祇云」、書人は「十口

小書」となっている。

一方、初雁文庫本は本行は「宗祇云」、書人は「祇記小書云」、

または「小書云」としている。但し、一部「古今抄」は「十口抄」、

外の項目を見ても、基本的には本行は「宗祇云」、書人は「十口

小書」となっている。
十名奥書が元禄十三年、十四年の年記を有するのに、序注、末奥書の年記が元禄十七年に在る点が気になるからである。後考を伴つこととする。

さて、比較にはいるが、『古今集序抄』と新撰文庫本を改め引用するにはあらゆる紙幅を要すること、両本については『教端抄』における片桐氏の解説の中の引用もしくは影本を見られない。

会体として見れば、本書の記述は詳細で、新撰文庫本よりも『古今集序抄』に近い。しかし、関係は単純ではない。また、片桐氏が言及されている日本のこの箇所の内容とも明らかに異なっている。

まず、冒頭であるが、『古今集序抄』新撰文庫本とともに『十口抄』の引用『此段は哥の徳をあげて（曲）から始まるが』 Ngô

以下、引用は断らない場合も、『古今集序抄』により、本書においても異なり、以上の一文のみで引用を中断して、『十口抄』から本書にない部分の引用がある。続いて、『師説番』に於て後のことなく述べる

まで飛んで、以下能因、幸平の諸文説を記す。その後、先の『十口抄』の続きにとり、『天地をうごかすともに事理の二

両者を比較すると、一見、本書の形がむしろ元の形で、『古今集序抄』新撰文庫本においては、能因の説話及び後の説話

に於いての説話が唐突に現れるため、本書の形に基づいて引用を分

注で後に説明する旨の注記を要するが、両本のように引用を分

注して先に説話を説明してしまえばその必要がなくなるからで

ある。但し、これをもって本書の成立時期が『古今集序抄』以前と

ならないのは奥書からも明らかである。片桐氏が指摘されるよ

うに『古今集序抄』『教端抄』諸本においては説を加えるものに

生かした進展はなく、手抄の草稿によってその都度諸注を減

し、あるいは順序を変えるからである。

なお、雨の歌が本書では、能因、幸平、兼直、小町と四首

注とし、小町はない。初撰文庫本では能因、幸平のみである。
あはれとおはせ」となるのは諸本同義である。

この箇所、日本民歌の解釈によれば、赤染門部の部分
が他本より詳細で、和歌の一部が現在でされているとあるが、本書
は主題の一部である。しかし、『古今集抄』はそれと同様で、初詠文庫本
の記述は『古今集抄文庫』と大同小異で、明らかに日本大本と異なる
ことがある。一方、初詠文庫本は『文庫』を欠いている。

こうして、『教猿抄』の三本はそれぞれ少なかった違いないは
在っている（補記参照）。

前の『詩大正』の引用以外は、本書と『古今集抄』はほぼ
同義である。但し、『古今集抄』はその理由とする（初詠
文庫兼義）を欠いている。

一方、初詠文庫本は『文庫』を欠いている。つまり『古今集抄』
の引用に見られる限り、日本大本とも種々異同を有
する。本編、『片桐氏の引用に見る限り、日本大本とも
種々異同を有する。』

四

結局、諸本の改辞の手順とその理由は不明といわざるを得
ない。
古今和歌集序

紀淑望

四序定家卿の嘉禄本にはなく貞応本にあり、此真名序な
きを冷泉家に用ひる、其故は俊成卿用ひ給し本とか
や、二条家の旧本なり、一華抄に基俊朝臣云、貫之か
高秀の仮名序の抄等に真名序を鋏揮し注させしづ事
して、尤ほし、尤注に注解をはへて用られ待りけ
ば重ねて抄せしもの也

これが初稿文庫ではこうなっている。

一華箋、古今真名序を淑望と作者をかきたいけれども、貫之
作也、定家卿の箋云、一説、永正記云、当集真名序
は紀淑望書之。実はには紀淑望長谷雄卿書之。又云、
当集真名序を不用、其故は俊成卿基俊に対して伝授の時
間真名序を沙汰せずに、彼本はかん序ばかりと、然
いに正本これなきに、貫之がむすめに書て授る真
名序を沙汰せずにと、一義雲、正本序は探覧にあ
たばざる故序に之云。此真名序を鋏揮せしと、貫之
二条家の旧本なり、一華抄に基俊朝臣云、貫之仮名序を土代として淑
望をは、尤注に注解をはへて用られ待りければ
ば重ねて抄せしるもの也

では珍しく初稿文庫の方が詳細です。ここなどはいずれ
が元の形なのか一覧に言いにくい。

次に注釈を例示する。「人之在世不能無為思慮憂患哀楽相交」

の箇所を見る。本書はこのようにある。
哈拉姆的「同性恋」群体和他们在哈拉姆的活动。

哈拉姆的「同性恋」群体和他们在哈拉姆的活动。
本書は十口抄の初稿文を本として諸家の説の言注のたすけなるべきを用ひて管注し、師説の裏説を書添

で、高秀抄が見えない。また、日大本が「高秀抄」を挙げ

ないながら、「此抄に未高秀の古今序抄等を交へ用」と

及びするのに対して、本書は何らの記述もない。

さらに、内容的には、本書と初稿文庫本とは類似しているが、

多少の違いがある。例えば、「十口抄」において、本書は書人

が二色の合点で区

別されていることに触れ、「肖相黄宗頌朱小抄を加へ」と、

黄色の合点が肖相の「古開」、朱色の合点が「宗頌開書」であ

ることを明示し、正しい説明をしているのに対して、初稿文

庫本には「十口小抄著小抄等著肖相抄」とある、「古開」

のみならず「宗頌開書」の書人があり、二種類の注が区別され

ていることが明示されない。

その他、本書では「十口抄」の項で「此抄是道注と書是也」

あるにかかわらず、「既述のように、本書では「十口抄」は

「十口伊」を表記していて整否を欠いている。

以上、断片的な紹介にして終始したが、本書が従来知られている

「教狐抄」とは様々な点に違いがあることを指摘して、本稿を

終えるものとする。

【注】

「初稿文庫本」「華抄」（「一四」目録）には「古今和歌

集抄」とある。叢文抄の注記によっていると、一部に艱難があるも

のの、一華抄の注記によっていると、一部は比較すると、一部に艱難があるも

のの、「一華抄の注記によっていると、一部に艱難があるも

のの、一華抄の注記によっていると、一部に艱難があるも

のの、一華抄の注記によっていると、一部に艱難があるも

のの、一華抄の注記によっていると、一部に艱難があるも

のの、一華抄の注記によっていると、一部に艱難があるも

のの、一華抄の注記によっていると、一部に艱難があるも
季時は江戸に出た。矢春は陽徳院を〈中略〉季時は再

昌院と称す。とある。

なお、「再昌院」は古今集の名所の「永楽宮之再昌院」に、「法教」の名前である。

柳沢百嵐の時代を回想した正親町封刀の「松蔭記」には、「瑞春院」を「瑞春院」に、「三の丸」を呼んでいる。

また、「武尾師母」の名を名実にした瑞春院が「瑞春院」に、「三の丸」を呼んでいる。

の二百回退善会を催し、一族知友から詠進、信験らも漢

師の百作集の詩文を詠むともある。高木貞福氏『季時自筆の宗祇百回集』に、「戯笑を詠む」とある。

季時は江戸に出た。矢春は陽徳院を〈中略〉季時は再

昌院と称す。とある。

なお、「再昌院」は古今集の名所の「永楽宮之再昌院」に、「法教」の名前である。

柳沢百嵐の時代を回想した正親町封刀の「松蔭記」には、「瑞春院」を「瑞春院」に、「三の丸」を呼んでいる。

また、「武尾師母」の名を名実にした瑞春院が「瑞春院」に、「三の丸」を呼んでいる。

の二百回退善会を催し、一族知友から詠進、信験らも漢

師の百作集の詩文を詠むともある。高木貞福氏『季時自筆の宗祇百回集』に、「戯笑を詠む」とある。
なぜ元来の形式は判然としない。ただ、ここでも初雁文庫本の独直線的な改稿ではなく、李吟の手元の草稿本からその都度薄書されたのではないかとされた。

そこで、本稿で紹介した家蔵本を加えるとどうなるであろうか。

家蔵本が日大本に近く、なおかつ異同も相当あることとは、すでに記したところである。また、奥書の事実は信ずるに足らぬものであるが、家蔵本がいつ成立したかは、問題が残る。

元来元禄十一年成立とされている家蔵文庫本の成立年次の書名を有する点は考慮すべきであろう。

結局、家蔵本と初雁文庫本の成立年次は確定しがたいと言わざるを得ない。

そのため、初雁文庫本はそれがいつ成立したかに関わらず、教端抄本は元来元禄十一年成立にしてよいかどうかが問題があることなる。

ただし、教端抄本中で異色の内容を有することが明白となった。

教端抄本中で異色の内容を有することが明白となった。